

Star to Rain

SAMT

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、伝説的な人気を誇ったアイドルグループ“f i t z , s の元メンバーの1人である真白小夜子。

新たな活動、可能性の模索として女優の道を挑戦する。

目次

彼女の名は	1
Dream Fighter	7
Bemine!	15
深く潜る	22
リニアモーターガール	32

彼女の名は

ダークモカチップフラペチーノの左隣に書類が滑り込む。赤色のホチキスで綺麗に纏められており、ボブカットの黒髪の女は、白のオーバーサイズTシャツを可愛らしく揺らして覗き込む。

「なんですか、これ」

その質問に、眼鏡をかけた初老の男は年季を感じさせるガラガラとした声で「仕事」と答える。

「仕事？」

「うん。新しい、ね」

「新しいって…」

ダークモカチップフラペチーノの飲み口に口を付けて、新しいという言葉をメリーゴーランドのように回す。

そんな様子を見て、男は優しく微笑む。

「真白小夜子の現状が長く続くわけじゃないのはわかっているんだらう？」

「……はい」

小夜子。そう呼ばれた女は、顔を伏せて肯く。その声は僅かながらに震えていた。

「やってみたら？もしかしたら、あの頃みたいに楽しめるかも」

男はそう言い残してその場を後にする。小夜子は顔を上げ、書類に目を通す。

「女優かあ…」

久しぶりだな、この仕事。

今はこの場にはいない二人を思い浮かべて、漠然とそう浮かべた。

* * *

「そうなんよ。女優の仕事を受けてみろって山ノ井さんから言われて」

小夜子は自室のベッドに腰掛け、足爪に薄い翠のマニキュアをネイルしている。彼女の隣にはスマートフォンが無造作に置かれていて、画面には通話中という文字と、スピーカー通話のアイコンが表示されている。通話先の名前は、にしだあやめ西田彩芽。

『へー、女優』

「そ、しよーじき緊張してるけん上手くできるかわかんないのよ」

西田彩芽は小夜子のアイドル時代：フェイスf i z, sのメンバーの1人だ。小夜子とは同郷の幼馴染みであり、彼女を前にすると小夜子は方言が戻る。

『大丈夫よ、サヨならできるけん。YDKなんだから』

「そんなことないよー」

『ウチがあんたを加入させた理由教えよつか？あんたがいたらウチらはもつと上に行けるし、何かを起こせるって思ったからよ』
「それ何度も聞いたよ」

小夜子はもう何十回何百回聞いたかわからない加入時の理由を聞く。何百回と聞いても、彼女からのその言葉はとても心に染みるし、嬉しくなる。思わず頬が緩む。

「でも、嬉しい。元気出た」

『なんかあったらウチらに連絡しい。サヨの魅力は1番ウチらがわかってるけん』

「うん、ありがと。やっぱりアヤちゃん好き！大好き！」

『ホントに単純なんだから〜』

と、喜びと愛を爆発させた拍子に、マニキュアの染色液が詰め込まれた瓶がコンツ、と床に落ちる。

「あつ、ヤバイっ、マニキュア落とした！」

『何やつとんの！除光液！』

「除光……切らしとる……」

『これだからサヨは！』

『固まるまで待つときんしゃい！』という怒声が響く。懐かしい心地よさと愛おしさに瞳を揺らしながら、夜は更けていった。

小夜子は資料と一緒に配られたパンフレットの道案内に沿って、とある雑居ビルに向かった。

受付嬢に話を通して、小夜子は静かに雑居ビルの中を巡った。その中の一室、その扉の前で静かに心の準備をしていた。

「……知らない人しかいないんだよなあ……」

小夜子はかなりの人見知りである。昔活動していた音楽グループの幼馴染みたちがいないと見知らぬ人に話しかけられないぐらいの人見知りだ。

あー、やばい。お腹痛くなってきた。死にそう。

そんな心のやりとりをずっとさつきから繰り返している。

ドアノブに手を付けたら多分その音で外にいるってバレるんだよなあ。嫌だなあ、なんなら会わずに終わりたい。

ドアノブまで数センチの距離感を保ったまま、ずっと深呼吸の繰り返し。返す。

額に流れた気がした汗を拭って、また深く深呼吸。何度目だ、これ。なんて客観視してしまうぐらいに居座っていると。

「あの、関係者の方ですか？」

と、背後から声をかけられた。

「ひゃいっ!？」

心臓が破裂しそうになった。

呼吸が熱くなっているのを覚えた小夜子は、恐る恐る振り返る。

そこにいたのは、まる眼鏡を掛けた、そばかすが目を引く小柄な少女だった。

「え、えーっと、関係者というか、これからというか……」

「これから?」

小夜子の早口の弁明にに首を傾げる。そりやそうだ、こんな緊張してる女なんか不審者に見えて仕方がないだろう。

「……よくわからないけど、関係者なら堂々と入ったら?」

「デ、デスヨネ……」

少女の正しすぎる正論に押し負ける二六歳。

少女が小夜子の一步前を行きノブに手をかけて、慣れた様子で開ける。

明らかになった部屋の中は、円卓のようにテーブルが囲んでおり、そこに横並びで配置されたパイプ椅子に腰掛ける年代様々な男女の姿が。そしてそれらを率いるような形で、一番奥に居座る初老のガツチリとした大柄な男性が目を引きいた。

「七生、誰だそいつ？」

「関係者っぽいです」

「関係者？」

眼鏡をかけた、いかにも色男といった青年が訝しむように小夜子を見る。と、そこで驚いたように眼鏡の奥の眼を見開く。

「つて、その人サヨじやん！なんでここにいんの!?!」

「誰よ、サヨって」

「フィズのメンバー！」

「あー、フィズの」

部屋の中がどよめきに包まれる。それもそのはずだ。

感情がジェットコースターのように縦横無尽に動き回る眼鏡の青年に小夜子は後引き、「ド、ドウモ…」と弱々しく作り笑いを浮かべるしかなかった。

「来たか」

と、半ば遊園地と化していた室内を一瞬にして葬儀のような静けさに包ませた低い声の一つ。

その声の主は、先ほどの初老の男性だ。

「山ノ井から話は聞いている。演出家の巖だ」

「あ、真白小夜子です。本日はよろしくお願ひします…」

「本日から、だろ」

巖が再び低い声をがならせる。そのひと声だけで、小夜子は自分が猫を前にした鼠になっような気分になった。まるで押しつぶされてしまうかのような、威圧と空気が彼からは醸されていた。「すいません…」、と無意味にも思える謝罪を小さく溢した。

「本日からって…巖さん、どういうことだよ?」

眼鏡の青年が身を乗り出して聞く。その言葉に、巖は面倒くさそうに背もたれに背を預けて「言い忘れてたな、亀」と答える。

「今日から真白小夜子がこの舞台に加わる」

——え。

再び、室内がどよめきに溢れ返る。口にする言葉は三者三様であるが、その感情は皆「驚き」で統一されている。

「なんで…サヨって女優経験ないでしょ!?!なんでまた…」

そりやそうだわね。一応アイドルでやっていて、演技経験はゼロではないけれど、限りなく未経験に近い状態だ。昔、テレビ局の企画で友情出演した単発ドラマの演技も、色眼鏡ありきのレビューしかなかった。

自分の存在が、心臓が、鼓動がどんどん小さくなっていく感触を小夜子は覚えた。

「なんだ亀。おまえ俺の配役にケチつけるのか?」

「いやっ…でも……」

亀と呼ばれている青年は、巖のその一言で空気の抜けた風船のように萎縮してしまう。その空気が感染したのか、室内全体が二度沈黙に包まれる。

まだこの部屋に入って数分しか経ってないが、いつもと違う空気感なんだろうな、と直感した。

「まあ」

そんな沈黙を、ナイフを振りかざすように破く声が一つ。

「巖さんが言うのなら、たぶん間違いはないんだろう」

ヒョロリ、そんな擬音語が漫画のように背後に見えてしまうような華奢な青年が席を立つ。青年が席を立った瞬間、みんなが固唾を飲み込む音が聞こえた気がした。

「ただ、一つだけ教えてほしい」

視線は、小夜子へと向けられる。

「真白さん、アンタにとって役者ってなに?」

息を飲む。

それは、とてもシンプルな質問。
けれど、とてと複雑な回答を求められる質問。

答えなんて、わからなかった。
だって演技なんてお遊戯の延長線上のことを少しやっただけ。
評価なんて貰えなかった。ただの「よくやった」の一言だけ。
そしてそれに満足した気でいた、自分がいただけ。

沈黙は、小夜子にも感染した。
肺が膨張したままだ。血の流れが早い。瞬きすらうまくできない。
小夜子の沈黙に、青年も、巖も、室内も、みんな沈黙で返す。
答えを間違えれば、たぶん放り出される。あの廊下に。このビルの
外に。冷たいアスファルトの上に尻もちをつく。

何かを答えなければならなかった。答えるべきではなく、答えなければならぬ。

「……誰かに、なりきる……ですか……？」

逃げるように、青年に視線を合わせず、自分の履いているコンバースの赤いシューズに視線を落としながら、弱々しい声で答える。

その答えに、青年はため息を吐いた。そのため息が、振りかざされた拳のように痛かった。

「そうか……巖さん、真白サンに台本を」

興味を失ったような「真白さん」だった。こんな呼ばれ方したの、生まれて初めてだ。

形容し難い不安に駆られて涙が出そうになる。

「ふむ……そうか」

巖は何かを納得したような頷く。

分厚いA4サイズの台本を片手に、巖は皆を見渡すように視線を動かす。

「稽古場に行くぞ。台本を忘れるなよ」

その言葉に、小夜子はただ「はい」と言うしかなかった。

D r e a m F i g h t e r

稽古場というより、そこはレッスルームだった。壁を覆う鏡に、ワックスの効いたピカピカな床。

決して広いと言える部屋ではなかったが、そこには13、4人ほどの男女が集っていた。小夜子はその中で、他の人たちとは少し距離を取り、扉のすぐ隣に膝を屈めて、先ほど質問した青年を見ていた。

初対面で、結構すごいこと言われた。

あの瞬間、小夜子はただ呆然としていただけで、今でもあの瞬間を思い出すと、恐怖と恥ずかしさで胸が嫌に熱くなる。

「真白」

巖が小夜子の名を呼ぶ。防音の室内では彼の低く少しがなりの効いた声はいつもよりよく響く。「は、はいっ!」と、驚いた小夜子は立ち上がり、背筋を伸ばす。

「ごつちに来い」

「は、はい」

巖に言われるがまま、彼の元へ向かう。小夜子が歩くと、集団は掃けていき、さながらモーゼのように巖までに道ができる。

「これからお前には即興劇をしてもらう、一人だな」

「えっ……!」

即興劇。それはアドリブ。頭の回転と感情の整理、そしてそれについて来れる表現力と体が要求される、演技の中の演技。

「世界観、ストーリー、登場人物、そういうのは気にしないでいい。好きなようにやれ。時間も無制限だ」

「ちよつと待ってください!私そんなのできません!」

「できるかできないかなんて聞いてない。やれ」

その一言に萎縮してしまう。

そうだ、ここはもう稽古場。既に役者の仕事と義務は始まっている。そして、演出家である巖の要求に応えるということも。

「何でもいい。好きなようにやるんだ」

その一言は、小夜子を悩ませるには充分すぎる一言だった。

ああ、もう！

なんて勝手なのよ。そんなの無理よ！

困惑と怒りを心の中で爆発させるが、しかし目の前で腕を組んで待つ巖には通じない。

定まらない決意のまま、やりきれない戸惑いを捨てて纏まらない意識を鷲掴みするように一つにする。

深呼吸をして、息を整えて、くしゃくしゃに小さくなった新聞紙を広げるように、イメージを描き出す。

そう、私の頭上に広がるのは――青空。

「――あなたが逝ってから、もう二週間ね」

その台詞は、突然小夜子の頭の中に浮かんだ。景色も、音も、匂いも、何も感じれていない。

「私はまだ、引きずってるわ、あなたのこと」

言葉ちぐはぐで、文法もなっていないかった。その言葉たちは、振り絞るといふよりも、ただ乱暴に投げつけているだけに近かった。

そつと、何かを取るように手を動かす。何かを掴んで、それを胸に抱き寄せる。

「どうして…」

そして次の台詞を言おうとしかけたその時、巖の咳払いが稽古場にこだました。

「わかった。もういい」

巖の突然の中断に、小夜子は驚きと恥辱の感情が胸に渦巻いている感触を覚えた。

耳まで真っ赤になっっているに違いない。身体中が熱い。

巖は小夜子に近づき、その目をじっと見つめる。まるで眼の奥の、ブックボックスの鍵穴に鍵を差し込まれるような、そんな目だった。

「おまえに台本を渡す。家で読んで覚えておけ」

渡された台本を受け取る。

そこには『リア王』と記されていた。

「今日は見学だ。明日から本格的に参加してもらおう」

小夜子は何も言えずに、ただ巖の言葉に頷くだけだった。

「七生、亀」

「はい」

「ウツス」

「おまえら真白の教育係だ。色々教えてやれ」

「ええっ!？」

「別にいいでしょ。実際問題、右も左もわからないんだから」

七緒、そう呼ばれたそばかすの少女は小夜子の元へと歩き、親指でクイツ、と壁の方へ行くのを促す。

「とりあえず、そこで見ててください。まあ読み合わせも終わってないし、今日は簡単な動きの合わせですから」

すっかり自信と感情を喪失した小夜子は、本日何度目かの促しに静かに応じるしかなかった。

みんなが少しの動きを入れながら台詞を言い合っているのを、小夜子はいわゆる体育座りですっと見ていた。

さっきの私のとそう変わりはないんだけどなあ、なんだろう、この魅力の違いは。たぶん、さっきの私のアドリブ、全然こんな感じじゃなかったんだろうなあ。

そんなことを思いながら、観察していた。

「大丈夫ですか、色々と」

七生がペットボトルのミネラルウォーターを小夜子の足元に置き、左隣に腰を下ろす。

「あ、ありがとうございます…」

「そんな畏まらなくて大丈夫ですよ。歳は私の方が下だし、芸歴なんて天と地ほどの差なんですから」

「な、なら、私の方も敬語は無しでいいですよ。この環境だと、私の方が後輩だから」

「……なら、そうさせてもらおうかな。その方がやりやすいし」

少し小夜子の方に身を寄せる。

「私、さんざかななお三坂七生。好きなように呼んでいいよ」

「あ、私、真白小夜子。今日からご迷惑をおかけします…」

「迷惑というより世話ね、この場合」

七生は少し微笑む。意外と、素直な娘だなあ、と小夜子は呑気に思う。

「真白さんは…」

「あ、下の名前でいいよ」

「…サヨはさ、どうして天球に来たの?」

『天球』。それはここにいる役者が所属する劇団名であり、日本でも有数の知名度と評価を受ける劇団である。

「どうして…これ、言っちゃったら怒られるのかな…」

「どんな理由であれ、ここにいることを巖さんが認めただから大丈夫よ。とある奴なんて、ここに来てから寝てるだけなんてのもあったし」

「えっ、寝てるだけ…?」

それって大丈夫なの。今もここにいるのかな。

「…言われたから、っていうのがまず一つ」

「やっぱり、そういう感じよね」

胸が締め付けられる。もともと知名度のある小夜子である以上、突然の加入はそういう目で見られても仕方のないことだが。いざ言われると耳が痛い。

「でも、新しい自分を見つけたい、っていうのもあった。今のままだと、限界があるって感じてたから」

逃げるようにそう言う。この理由が本心かどうかは、まだ小夜子にはわからなかった。

「そういう気持ちがあってもあるなら、たぶんできるよ」

七生は優しい声でそう言う。上辺だけの言葉かもしれないが、今の精神状態の小夜子を復活させるには、充分すぎた。

「七生ちゃん…」

「ちゃんね。初めて呼ばれたわ、そうやって」

目尻に涙を溜める小夜子に呆れ笑いする。と、そんな二人の間に近寄る足音。

「なーんか楽しそうだな、お二人さん」

二人の前に猫と呼ばれていた眼鏡の青年が爽やかな笑顔でいた。

「なによ亀、さっそく口説き？」

「んなまさか。いや、そっちがいいならその気にならなくもないけどよ」

七生の隣にずいつ、と強引に腰を下ろす。七生は嫌そうに小夜子に歯を見せる。

「俺、青田亀太郎。あおたかめたろう 今日からよろしく、サヨ！」

いきなり下の名前呼び。距離感の詰めかたが自分と全く大違いだ。これが陽の人間…。

「あんた…一応年上なのよ」

「ここでは俺の方が先輩だしな」

「その内あんたなんて追い越されるわよ」

「そんなことないよ、さっきなんて見る価値もないって感じで巖さんも中断させてたし…」

その小夜子の卑下に、亀太郎は身を詰め寄って「んなことないぜ」と否定する。

「さっきのサヨ、まあ台詞とかの棒読みはエグかったけど、あの動き、さすがだったよ」

「…：亀と同じ意見になるのは釈に触るけど、同感。動きは良かった、本当に」

思わぬ賛辞に、小夜子は驚く。いや、そんなことないって、と首を全力で振る。

「やっぱり、フィズのダンスって凄かったんだなって思ったわ。動きで何かを表現するっていうことだと、たぶん阿良也といい勝負できると思う」

「阿良也…？」

小夜子の疑問に、七生が動き合わせをしている役者陣に指を指す。

「あの細くて長い、目つきの悪いロン毛。さっきサヨにあれやこれやって聞いてた奴」

あの部屋で、小夜子に「役者とは何か」と聞いてきた青年だ。一人

巖の居座るパイプ椅子の傍で、小夜子のようにぼーっと動き合わせを見ている。

「あの人、そんなにすごいのか？」

「みょうじんあちや明神阿良也。すごいってもんじゃない、うちのエース」

「まあ、一応主演だからな。女には俺の方がモテるけどよ」

「聞いてないわよ」

亀太郎から少し距離を取る七生に小夜子は苦笑いを浮かべる。

「あ、でも、すごいとは言ってもあいつにはアドバイスとか聞きに行かない方がいいよ。よくわかんないから」

「天才故の感覚の違いってやつだな。記者からもわけわからんって顔されるし」

なるほど、よくアニメとか漫画にいるやつね。

「まあ、兎にも角にも、本番までにどうにかするしかないわな、今のサヨは」

「ウツ……はい、精進します……」

「ナハハハッ、そう気張らなくても大丈夫だって。巖さんを信じろ、な？」

亀太郎の優しい言葉と、温かい励ましに瞳が熱くなる。

「亀くん……ありがとう……！」

「お、おお。亀くん？」

「うーわっ、亀がこうやって感謝される日が来るとか。こりや明日は槍が降るな」

槍が降ったって別にいい。

私の知らない人たちが犇き合う、私の知らない世界。

そんな世界で私を応援してくれる人がいる。真白小夜子を、見てくれる人がいる。

「槍じゃなくて、星を降らせるよ」

「星？」

「うん。流星群みたいな、綺麗なやつ」

それはきつとこの世界で一番綺麗で、私の希望になる星たち。

先ほどと打って変わって自信に満ち溢れている小夜子に、七生は吹

き出す。

「面白いね、サヨ。うん、私そういうの好きだよ」

七生は笑顔だ。少し目つきの悪い、陰気を感じる風貌だけど、笑うと可愛いじゃん。

小夜子も笑みを浮かべて頷く。

「見せてよ、星をさ」

「約束するよ」

フィズの頃、ドームをいっぱいにするほど人々が集まった。それは小夜子だけの力ではなかったが、紛れもない小夜子の実力が含まれていた結果だった。

十万人を楽しませたんだ。私ならできる——！

「ま、巖さんに認められてからの話だけだな」

亀太郎の何気ない一言が、小夜子の胸に突き刺さったところで、稽古は終わった。

なんとも忙しい一日だったと、帰宅後に小夜子は思った。

別に激しく体を動かしたわけでもないが、精神的と神経的な面が小夜子の疲れを最大限に引き出していた。

「あー……」

赤い牛革の鞆から、台本を取り出す。

まずは覚えなければならぬ。

『リア王』。

それはかの偉人、ウィリアム・シェイクスピアが描いた、とある王の悲劇。

私の役、なによ。

台本の一ページ目には役名とキャストの名が並んでいた。

後ろから数えたほうが早い。ちよい役なんだろうし。

自嘲気味に笑いながら目で追っていくが、なかなか見つからない。追い出してから数十秒、ようやく見つけた自分の名前、そして役名に驚愕する。

「うそ…コーデイリア役…?」

コーデイリア。

リアの末女であり、事実上のヒロインであり、四大悲劇の中で最も救いがないとされるリア王の悲劇の象徴の一つだ。

B e m i n e !

ブリテンの王、リアは老齢により隠居生活に入るため、今ある領土を三人の娘に分けようとした。長女ゴリネルに、次女リーガン、そして末娘コーデイリアに。

ゴリネル、リーガンは甘言で領土を渡されるが、しかし生来の実直さと素直さを持ったコーデイリアは、思ったことをそのまま口にした。それに怒ったリアは、コーデイリアをフランス王妃にする――

――いわば勘当した。

しかし、領土を手を取った二人の娘は、老齢により判断力や沸点の鈍った父親を国から追放する。

荒野へと放られたリアは、実の娘たちからの裏切りに、次第に狂気を孕ませていく――。

リア王とは、悲劇だ。

どうしようもなく救いようのない、完膚なきまでの悲劇である。

「――無理じゃん、私」

稽古場で、小夜子はそう溢す。

その姿に、亀太郎は「は？」と言葉を返す。

「いやだって、めちやくちや重要な役じゃん。無理だよ私こんなの」

「いやまあ、確かにデビューにしちゃ重すぎる役ではあるけどよ」

「亀くんは役作りとかしてるの？」

「してるっちゃしてるけど、俺の道化師役なんて普段の俺だからなあ……」

「いいねー、役作りが楽で」

「役作りに楽もクソもないだろ……」

そんな他愛もない話の間に、着替えを終わらせた七生が入る。

「でも、サヨの役だって私からすればかなり良いと思うけど」

「え、どこが」

「素直なところ。バカなぐらいにコーデイリアは素直じゃん。サヨと同じ」

「え、私ってバカなの」

バカという言葉に、軽くショックを受ける。一応これでも有名な大学には行つてただけだな……中退だけど。

「バカかどうかは置いておいて、あんたならこの役演じきれると思うよ」

「ま、巖さん次第だな」

巖さん。

演出家である彼には、演技のイロハも知らない小夜子にあれやこれやと教える役がある。

めっちゃ巖しいって聞いたんだけど、どうなんだろう。殺されたりしないかな。

心の奥で震えていると、「真白」と名前を呼ばれる。

「あ、はい！」

呼び主は、噂の巖。

「こっちに來い。いろいろと教えてやる」

あ、終わった。

別室に呼び出された小夜子は、震えながらパイプ椅子に腰掛けた。

目の前には巖が座っており、二人きりだからか、いつも以上に彼が大きく見えた。

「早速だが真白、どの台詞でもいい、何か言え」

また唐突だな。

言葉に出さず、言われた通りにページをめくり、目に入った台詞を言う。

「——お父様。お父様は私を産み、育て、慈しんでくれました」

抑揚を付け、息を吸い込み、できるかぎり声を大きくする。

「お父様のお言附けを守り、お慕いし、心の底から敬っております。でも——」

「よしそこまで」

電池を切るように台詞を止める。巖の顔色を窺うが、彼の表情は一

貫して変わらなかった。

「おまえ、いま俺に自分の芝居はどうだったかって思っただろ？」

「えっ。な、なんで？」

「凶星か。おまえは本当に正直だな」

心を読まれて絵に描いたように焦る小夜子に笑みをこぼす。あ、笑えるんだ、この人。

「真白、なぜそんなに大袈裟に振る舞う？」

「……声を大きくしないと、観客に聞こえないから？」

「言い方を変えようか。なぜコーデイリアから離れた演技をする？」

コーデイリアから離れる？

心の作り方というわけか？それとも、表情の作り方？声色？

「違うな。真白、おまえ自身だ」

「またっ……」

なに、この人メンタリストか何か!?もしかしてこれドッキリ!?

カメラはないかと探す小夜子に構わず、巖は「おまえは素直すぎるんだ」と続ける。

「真白、リア王を読んだか？」

「は、はい」

「それでおまえの役、コーデイリアにはどんな印象を持った？」

昨晚、そして今日ここに来るまでの電車の中で読んだ内容を思い出す。

「……愚かなぐらいに、正直で優しい娘、です」

「そうだ。コーデイリアは正直者だ。それもバカが付くほどな。おまえと同じだ」

七生ちゃんと同じこと言ってる。

——バカなぐらいにコーデイリアは素直じゃん。サヨと同じ

七生の言葉を思い出す。…そんなに私ってバカっぽいかな。

人生で二度も、それも別々の人からバカと言われたことに軽いショックを受けつつ、しかしそう言われるならば私とコーデイリアは近いのかもしれない、と詰めていく。

「俺が言いたいのはな、もつと自分に正直な芝居をしろつてことだ」
「自分に正直？」

「この世の中には嘘つきしかいねえ。小さい嘘を吐く者、バレたら捕まるような嘘を吐く者、それぞれな」

嘘とは人を形成するものの一つ。嘘がなければ世界は大きく違っていたかもしれないし、そもそも人はここまで発展した社会を築けていなかっただろう。

「そんな嘘つきたちの世界で、正直者になる覚悟を持った者を役者というんだ」

巖はシャツの胸ポケットから煙草を取り出し、使い捨てライターで火をつける。ボツ。発火の音がやけに耳の中でこだました。

「真白、おまえは才能がある。役者でなくとも、表現者になるべくして生まれたような人間だ」

煙を小夜子に当たらないようにと顔を上げて煙を吐く。

「もう一度だ。台詞を言え。同じやつをな」

自分に、正直。

台詞、役というこの世に存在しないフィクションの存在を、いかに正直に、そして本物に近づけるか。

ああ、そうだ。

「ああ、私を御覧になって、そのお手で私に祝福を」

コーデイリアを演じるのは、他でもない私なんだ。

私は、コーデイリアなんだ。

「合格だ」

煙草をくわえた巖は、小さく笑みを溢した。

その日の帰り、小夜子はレンタルビデオ店に立ち寄った。普段はアクション映画、アニメのコーナーしな見ていかないが、今日は違った。舞台映像。劇団天球の舞台で映像化された作品数は、その知名度に比べて少ない。

『人々の社』。そんな中でも、数少ない存在する作品だ。

経営難に陥った神社を建て直すために、神主や巫女、そして町の

人々が奔走する話だ。

主演はもちろん、明神阿良也。役柄は若い神主だ。

映像の中で、阿良也は見事に若い神主を演じていた。若いからこそ出る危うさとフレッシュユキ、まだ全てを知っているわけではない未成年な在り方を、まるで本当にそこに存在しているかのように演じていた。

——恐ろしいほどに、リンクしている。

映像越しでこう感じれるほどだ。舞台という客席と壇上の近さなら、もつと迫力があつて、阿良也の役に感情を入れ込んでしまうのだろう。

確かにこれはエースだわ。

七生と亀太郎の言っていたことは何一つとして間違っていないかった。

阿良也は巖の言っていた言葉を地で行っている。彼の芝居は、間違いなく本物だ。

これが、劇団天球。

私は名前以上にすごいところに参加してしまっているのかもしれない。

その日、小夜子はもう一度台本を読み直した。何度も何度も、睡眠時間を普段より二時間削つて、ベッドの上で台本を握り締めながら寝落ちしてしまうほどに。

「阿良也にアドバイスを聞く?」

七生はその日、初めて小夜子から言われた言葉に啞然とした。

「やめたほうがいいって。翻訳できるやつ誰もいないのよ」

「でも、阿良也くんに聞かないとわからないと思うんだ。この舞台っていうものは」

「どんなこと言われても知らないわよ」と意味深な忠告を受けた小夜子は、中庭のベンチでカップラーメンを頬張る阿良也に声をかけた。

「……えっと」

「小夜子。真白小夜子」

「ああ、真白サン。何か用？」

「うん、聞きたいことがあって」

阿良也の隣にずいっと座る。座りやすいようにと阿良也は少し左に寄る。

「昨日さ、人々の社観たよ、DVDで」

「ああ、ありがとう。あれは良い脚本だった」

「確かに、構成が丁寧で、落ち着く話だった」

『人々の社』には、一切の悪意が無いように感じた。人々の喜びと奮起に、胸がいつぱいになったのを小夜子はまだ覚えている。

「それで？」

「うん、それでさ」

阿良也の顔を覗き込む。長い彼の黒髪からは、どれだけ手を伸ばしても掴み取ることでできない、深海の底にある宝石のような瞳があった。

綺麗な瞳。

こんなに綺麗な瞳も、役によっては彼はいとも容易く操ってみせるんだ。

「阿良也くんは、どうしたらあんなに役の感情を引つ張り出せるの？」

小夜子の質問に、阿良也は少し呆気にとられたように半口を開ける。その口で、ずるずると麺を啜る。口を拭って考え込む。

「……例えば、ダイビング」

一分半ほど待って放たれた言葉は、一見無関係に見える比喩表現。

「人が海に潜る。数メートル…人によっては数十まで行く」

潜ることを表しているのか、手をすーっと足元へと下ろす。「そこで掴むんだ」と何かを握りしめ、そして元にあった胸の前へと腕を戻す。

「そういう風に、役を捕まえる。そして食うんだ、それを」

カップラーメンの残りのスープを飲み干し、「これみたいだね」と付け足す。

……なるほど、わかるようでよくわからん。

「……よく理解できないって顔だね」

「えっ、バレた？」

「顔に出やすいね、真白サンは」

天球に来てから三度目の台詞。ポーカーフェイスの勉強でもしよ
うかな。

「無理もない。あなたからは匂わないからね」

「に、匂わない？」

「うん、匂わない。何も無いわけではないけど、印象には残らない」

なんとなく、体臭どうこうの話ではないことは理解できた。しかし
その言葉が何を意味しているかは小夜子にはわからなかった。

「ど、どうやったら匂うのかな？」

「さあ？勝手にじゃないかな、わかんないけど」

彼は立ち上がり、ズボンの埃を叩く。空っぽのカップラーメンをゴ
ミ箱に投げ入れ、背伸びをする。

「話はこれで終わりでいいかな。これから巖さんのところに行かな
きゃいけないからさ」

「あ、う、うん。ありがとう」

「それじゃあ」

阿良也は手を軽く上げて、一切の躊躇いもなく背を見せて歩き去つ
て行った。あなたには何の興味をもちませんよ、という空気が、小夜
子には伝わってきた。

他人行儀でもあって、人を見ているようで見ていなくて、声もどこ
か空気が抜けていた。

「……匂い、かあ」

七生ちゃんの言う通り、確かに何言ってるかわからなかったな。

「でも、なんか行ける気がする」

阿良也のように背伸びをする。

私はまだこれからだ。

誰もいない中庭で、ひとり小さな奮起を試みせた。

深く潜る

よく晴れた空の下、都内の喫煙所には、巖がハイライトの箱を開けていた。一本を取り出し、火を付けたところで、彼にとって顔見知りの青年が訪れた。

「おはよ、巖さん」

「なんだ阿良也。おまえ吸うのか？」

「一本ちようだい」

「もともとたかる気だったか」

阿良也は巖の持つ箱から一本取り、使い捨てライターを手に持ち火を付けて、巖と同じく煙を吐く。ハイライト特有な強い刺激が脳を締め付ける。

「きつつ…いい加減やめなよ」

「うるせえ。人間、どうせいつかは死ぬんだ。だったら死ぬ直前まで吸っててかまわねえだろ」

「早死にするよ、そんなんじや」

「この老いぼれにその言葉は意味ねえよ」

久しく感じる、肺の中に入る有害物質に、頭がクラクラしながらも、阿良也は巖の顔を見る。ああ、またなんか考えてるわ、この人。

「なんで真白サンを呼んだの？」

「…俺の配役に文句あるか」

「いや、それはもういい。ここまで来たんだ、今からやめてもらうのはこっちも困る」

小夜子は既に台本を覚え、読み合わせにも参加している。亀太郎や七生といった劇団員たちともうまくコミュニケーションを取っていて、今の段階で外せば劇団の中に不協和音が生じるだろう。

「気になるんだ。なんで演技経験も碌に無い彼女を入れたかが」

巖がそんな判断をするのは初めて見る。無名の俳優だったらまだいい。ただ、彼女は元アイドル。育ってきた畑が阿良也たちとは全く違う。

「育成期間を設けたならまだいい。ただ今回はその育成期間も無しで即読み合わせだ。なあ、何が狙いなんだ、巖さん」

それは、巖のことを理解しきっている阿良也をもつてしても不可解な判断だった。巖の舞台にかける情熱と妥協のなさは全国的にも有名だ。そんな彼が、一体なぜ。

「彼女から匂うものはあまり無い。何も匂わないんだ」

阿良也は人から発せられる匂いでその人となりを見定める。それぞれに匂いがあつて、その人々はその匂いの通りに動く。

今回の小夜子の匂いは、普遍的でありきたりな、言つてしまえば素人とそう変わらない匂いだった。その事実がまた、阿良也を訝しみに拍車をかけている。

「……おまえ、それ本気で言つてんのか？」

ひととき白い煙を吐き尽くし、吸い殻を潰す巖。その後ろ姿は、いつもよりも大きく、そして強大に見えた。

「だとしたら、おまえの鼻はひん曲がつてるよ」

巖はそう不適に笑う。この人のこんな笑み、久々に見る。

「直わかる。あいつは化けるよ」

巖のその言葉に、阿良也は不思議と納得してしまった。まだ何も彼女はなし得てないのに、巖の声と言葉には不思議と、そんなことを感じてしまう力があつた。

* * *

「……わーお」

亀太郎は呆気にとられたように軽く口笛を吹く。

彼の視線の先には、硬い表情の、しかしどこか純朴さと華麗さを感じさせる小夜子の姿があつた。

「……不幸せな生まれつきなのでございましょう。私には心の内を口に出すことはできません」

目の前に立つ阿良也よりも、小夜子に目が行く。これは亀太郎だけではない、その場にいる全員が彼女に目を向けていた。

「確かにお父様をお慕いしております。それこそお父様の子としての務め、それだけの事にございます」

「すげえな、この短期間でこんなに。」

亀太郎がこうして付き合いの浅い人間に素直に感服するのはいつぶりだろうか。昔、テレビ番組で放送されていた、映画監督の目の前で、一瞬で表情を切り替えて自由奔放に歌って踊るジーン・ケリーを思い出した。普段カメラの前で見せることのない、自分だけに見してくれた秘密を知れた高揚感を持った同時に、彼がプロの役者であることを痛感させられたような感触。

今の小夜子は、間違いなく亀太郎にとってスクリーンの向こう側、自分の身の丈以上に高い台に立つ役者だった。

全身を使い、声帯を広げ、自分にだけ見えている世界の中で生きる小夜子。その小夜子に、巖は低く、声帯をすり減らしきったような声をかけた。

「真白。集中しきろ。まだムラがある」

その言葉に思わず動きをピツタリと止める。巖は変わらず無骨な顔をしていたが、彼は口を開くのを止めない。

「止まったな。おまえが芝居に集中しきれてない証拠だ」

「はい」

小夜子にとって、その言葉は凶星だった。小夜子の目の前には確かにブリテンの世界が広がっていた。煌びやかな城内、周りには絵本で見たような衣装を着た人々。しかし、彼女には亀太郎の口笛が聞こえていたし、巖がパイプ椅子に腰掛ける僅かな軋みも聞こえていた。

「本番まであと一か月をきつた。その集中力をもっと研ぎ澄まして、永遠に感じるぐらいに長く保たせろ」

「はい」

巖のその言葉が最後の一押しとなったのか、壁際まで歩いた小夜子は全身の力が抜けきり、思わずへたり込む。深く息を吐くと、七生がミネラルウォーターを小夜子の膝下に置いた。

「おつかれ。すげえね、サヨ」

「でしょ？結構良くなったと思ったんだけど…巖さん的にはまだまだ

みたい」

「…まあ、巖さんからああ言われるのは、むしろ本腰に入ったってことだから」

小夜子の隣に腰を下ろし、「認められたってことよ」と付け足す。だとしたら随分と時間かけてしまったな、と小夜子は心の中でこぼす。「よつす」

その二人に、ストレッチを終えた亀太郎が気さくに声をかける。小夜子も軽く「どもー」と返す。

「すげーなサヨ。いつの間にあんなに」

「ありがとー」

「ほら言ったでしょ。すぐにあんたなんか追い越すって」

「そんなことないよ！亀くんあの軽薄さ滑稽さを出しまくる芝居、私には到底敵いつこないよー！」

「それ褒めてるってことでいいの…?」

亀太郎の芝居の本質は脇役。つまり舞台を引き立てさせる力だ。彼の芝居を見て不快に思ったり、笑いを誘われたりすれば、それはもうある意味彼の芝居に魅了されてるもの同然のことだ。

小夜子は彼のその芝居の本質に驚き、彼の演じる役に嫌悪感を覚えたが、実際の亀太郎を知っていると、どうにも心の底から嫌いにはなれない。なかなか真似することのできない絶妙なバランスを保っている。

「それに、阿良也くんのアドバイスがかなり役に立ってるの」

「え、阿良也の!?!」

「うん」

阿良也の芝居論を聞いた小夜子は、彼の難解気味なアドバイスを元に、過去のリア王の映像を見続けた。歴代のコーデイリアはこう演じている。なら、巖が求めるコーデイリア、そして小夜子自身に合った彼女は深度どれぐらいなのだろう。

そんなことをずっと考え、自分とコーデイリアの共通点を探し続け、やっとの思いで一部分を掴んだ。今日の芝居は、そのたった一部分だ。

「阿良也の言ってることがわかるって……これが天才か」

「なんか変なことされなかった？」

「変なこと？」

え、なにそれ。そう聞くってことは逆に普段変なことしてるの、あの子。

「されてないけど……」

「まだか……。そろそろあんたに目をつけ始めると言うから、気をつけたほうがいいよ」

「な、何を？」

「背後とか？」

「背後!？」

ストーカーなの、あの子!?

共演者の知られざる一面を立ち聞きしてしまった小夜子は、その日、阿良也とロクに目が合わせられなかった。

その日の夕方、食堂の自動販売機に立ち寄った小夜子は、百二十円の缶コーラを手にとったところで、珍しく椅子に腰掛ける巖の姿を見た。彼の目の前には、一人の男性も腰掛けていた。

話の邪魔をしないようにしないと。そう思って忍足でその場を後にしようと彼らに背を向けたところで……

「あいつだよ、真白」

「真白?」

千里眼をお持ちですか、あなた。

巖に呼ばれ、彼らの間に腰掛けた。右隣に座る人物に、小夜子はどこか見覚えがあり首を傾げる。

「……もしかして黒山さん？」

「真白ってやつぱりおまえかよ……」

小夜子を前にしてバツの悪そうな顔をする。

黒山墨字。

人相の悪い不潔な見た目とは裏腹に、世界三大映画祭全てで入賞を果たしている稀有な映画監督。大衆への知名度はまだ低い、その実

力は業界では知らない人間はいない。

「なんだ、おまえら知り合いなのか」

「はい。昔、私たちのミュージックビデオ撮ってもらって」

「俺がまだ駆け出しの頃だかな。なんでもいいから仕事と金が欲しかったんだよ」

黒山に撮ってもらったミュージックビデオは国内で賞を取った。ダンスシーンを映すものが多かったフィズミュージックビデオの中では珍しく、ただ彼女たちが東京の街中を歩く姿を映しただけの、非常に抽象的でシニールリズムな映像だった。

「いやー懐かしいですねー。もう十年近く前?」

「だいたいそんなぐらいだな。おまえと会うのも四、五年ぶりっていったところか」

「確かあの年の映画祭だったかなー、ほら黒山さんが賞取ったやつ」

「なんでおまえらあそこにいたんだっけ」

「私たちが主題歌やってる映画も出品されてゲストで呼ばれたから」

「あーそうだっけ」

あの頃に比べて黒山さん髭伸びたし何か老けたな。

五年前に比べて、彼には余裕が見えたように感じた。目付きから声質、髪の手入れ具合に、控えめにのぞかせる腕の肉付き。些細な違いだ。漫画の絵柄が数年おきに変わるのと同じ違い。

「なんでおまえこんなところにいんの?」

「事務所の紹介と私の意思」

「おまえの?」

「はい。役者やってみようって」

「……へえ」

黒山は一瞬目を見開いたが、やがて納得したようにニヤリと笑った。

あ、このニヤケ顔。懐かしい。

「なあ、ジジイ。どんな調子なんすか、こいつ」

「ああ?どうもこうもない。この世界について右も左もわかってない小娘だ。おまえが思ってるより酷い状態だよ」

「酷い状態!？」

「やっぱり私まだまだだったよ七生ちゃん、亀くん！」

右肩上がりだった自信がへし折られた感じがした。それもバキツて音が出るぐらいの勢いで。

「だが、匂う役者しか使わないアンタが、こうして演技経験ゼロの真白を使ってるんだ。真白を降ろすことができたのに、な」
匂う。

阿良也も度々口にしていたその言葉。巖や黒山、阿良也といった実力者たちの間では、匂うか匂わないかは重要な問題だということの小夜子はなんとなく感じた。

笑い話だ、とでも言いたげに巖は鼻を鳴らす。

「まだだ。まだこいつからは何も匂わない、正直言つてな」

「調教中ってことか？」

「調教!？」

「羨だ」

「羨!？」

なんでこんなモラハラ飛び交う席に着いてしまったんだろう、と後悔する。巖の演技指導は厳しいことは業界内外で有名だが、言葉責めに合うとは聞いてなかった。

落ち込む小夜子に目をやり、喉を鳴らした巖が「おい」、と小夜子を呼ぶ。

「落ち込んでる暇があったらさっさと練習に戻れ。まだ終了時間じゃねえだろ」

「はい……羨けられてきます……」

「あ、そうだ」

おもむろに黒山はテーブルに設置されていた紙ナプキン入れから一枚取り出し、手早く何かを書き出し、紙ナプキンを小夜子の手に握らせる。

「なんかあるかもしれないから、うちの連絡先を渡しとく」

「LINEじゃないの？やだ、黒山さん意外と古典的……」

「俺の携帯じゃねえよ、うちの事務所だよ」

事務所……なんでこのタイミング？

「まさか引き抜き……？」

「相変わらずバカだなおまえ！」

「え、でもなんで？」

「なんか困ったことあったらうちに相談しに来いってことで」

「……という理屈で口説きにくるスカウトマンは多い。事務所選びには気を付けろよ、真白」

「ヒツ……」

「ジジイこの野郎！」

しかし小夜子には黒山が事務所の連絡先を教えた理由がどうしても理解できなかった。彼が役者の名前に興味がないのはどうの昔から知っている。本当にただの気遣いからくるものなのか。

「まあ、一応貰つとききます」

「ああ、そうしとけ。悪い話じゃないからな」

再びニヤリと笑う。

見た目といい、言葉といい、側から見ればただの怪しいスカウトマンな彼の笑みを訝しげに見つつ、しかし懐かしさを感じずにはいられなかった。

ずいぶんと昔になってしまったあの時代。

失ったものと、これから手にするものを交互に思いつつ、小夜子は皆がいる稽古場へと足を早めた。

* * *

「アンタ、ついに血迷ったのか」

だいぶ緩くなった缶コーヒーを片手に、揶揄うような口調な黒山。

若人————巖からすればだが————の生意気な言葉に眉を潜める。

「真白のことです。俺はあいつを撮ったことがあるからわかりますよ」

「何がわかるって？」

「巖裕次郎の舞台とは合わないってこと」

胸ポケットからタバコを手に取り、火をつける。既に飲み干された缶を灰皿代わりに、煙をわざと黒山に被せる。

「どうだかな」

鬱陶しく煙を手で払う。その姿に喉を鳴らして笑う巖を恨めしく睨む。「俺、非喫煙者なんだけど」と、臭いのついた服をはたきながらこぼす。

「残り少ないアンタの作品に、アイツを関わらせていいのか？」

「うるせえぞ小僧」

荘厳さと威圧感の入り混じった、大樹のような存在感。久しぶりに感じる圧迫感だ。

「言っただろう、"躰"だと」

手前の価値も理解してない彼女には、躰が必要だ。

表現者として、彼女はこれから羽ばたいていく。だが、肝心の羽ばたきかたを知らない。

「調教なんかじゃない。調教というのは、天使にやるもんだ」

「なら、アイツは一体何なんすか」

「雛鳥だよ、燕のな」

まだ産毛も生えきってない、巣から落ちれば命を落としてしまう、この世で最もか弱い存在。

「だからな、黒山。おまえがアイツに連絡先を渡した思惑は大体見当がつくから言っておくよ」

煙を吐き出しきって、灰を缶の中に落とす。プルタブで火消しをして、吸殻がポトン、と底に落ちた音が響いた。

「手を出すなら熟れるまで待っておけ。若い女の爪は鋭いからな」

立ち上がり、黒山の座る椅子の脚組みを杖で軽く叩く。煮え切らない、と訴えるように唸る黒山を尻目に稽古場へと向かった。

「……ああ確かに、アイツはまだ爪が尖ったまんまだよ」

離れていても大きく見える彼の背中に向かってそう呟く。

「けど、わかってるだろ。アイツにとってここはアウエイで、ウチがホームなんだよ」

立ち上がり、黒山もまたその場を後にする。
誰もいなくなったそこに残るのは、殻になった缶コーヒー、二本だけだった。

リニアモーターガール

ある日の午後。小夜子はスマートフォン画面を見ながら道を歩いていた。

女性誌のインタビューを終えて、一人で昼食をしようと近場のファストフード店を探していた時に、電話帳に新しく登録していた黒山のスタジオの連絡先が目に入った。

この連絡先をもらって五日が経過したが、未だに連絡を入れてない。というのも、電話に出るのが黒山とは限らないからだ。美容院の予約にも禄にできない人見知りの小夜子にとって、知らない人間との会話というのは鬼門以外の何者でもないのだ。

いやでも、そろそろ連絡入れないとマズくない？いくら黒山さんといえども、社会人としてその態度ちよつとどうなのよ。

社会人としてのマナーの呵責と、すぐに昼食を取りたいほどの空腹状態でもなかった小夜子は、その連絡先に意を決してコールボタンを押した。

『……もしもし、スタジオ大黒天です』

電話に出たのは案の定、黒山ではなかった。女性の声だ。それもかなり若い。

『あ、あの、そちらの黒山さんからの紹介で……』

『紹介？』

訝しげな声が聞こえた瞬間、あつ、これ私の苦手なパターン入ったわ、と絶望した。こういう時の対応ってどうやるんだっけ!? 『少々お待ちくださいねー』と、書類をめくるこもった音が聞こえた。

『……えっ、もしかして』

『すみません！間違え——』

『真白さん、真白小夜子さんですか?!』

『……はい?』

それからはとんとん拍子で進んでいった。事務員なのでであろう女性性は『お待ちしてます』と告げて電話を切ってしまった。

一応歓待されてはいるんだろう、と勝手に結論づけ、こうしてスタジオ大黒天へと向かっている次第だ。

黒山さん、ちゃんと話し通してくれてたんだ。

人相の悪い人間ではあるが、意外としつかりとしている一面と、知らない人と話してアポをとれたという達成感に安堵を覚える。あ、でもこういう時って何か軽い土産とか持参した方がいいんじゃないのかな。一応お世話になった人のお家なんだし。いやでも私みたいな人間が渡しても却って気を遣わせちゃうかも……。ただ挨拶に行くだけなのに…。

そんな後の祭りなことを悶々と考えているうちに、スタジオ大黒天に着いてしまった。

いやいや、何も持ってきてないから一旦引き返して何か適当にでも買っていったほうがいいでしょこれ。でももう時間的にも厳しいし…。

「——お腹痛くなってきた…」

二十六歳になるというのに、何をこんな小学生みたいなことを悩んでいるんだろう、と自己嫌悪に陥る。

「あ、来た来た」

そんな小夜子の下に駆け寄る一人の影。顔を上げると、そこには女性…というよりも有名スポーツブランドのジャージに身を包んだ少女の姿が。

「あ、えっと、先ほど連絡させていただいた…。」

「サヨだ！本物のサヨだ!!」

と、挨拶をするよりも先に少女は舞い上がってしまった。

「……あの〜」

「あ、すみません！先ほどご連絡を承りました、スタジオ大黒天の映像制作担当…兼、事務員の柊雪です」

ん、この声…。

その声は聞き覚えがあった。というより、

「えっと…さっきの…」

「はい、先ほど対応させていたただいた者です」

少女、雪はそう笑顔で小夜子を出迎えた。

雪に連れられ、小夜子はスタジオ大黒天の接待室へと案内されていた。黒いソファアーに腰を下ろして、雪がお茶を出す。

「すいません、墨字さ…黒山監督、ちよつと今席を外してて。たぶんちよつと待てば戻ってくるので」

「あ、どうも…すいません、何も持つてきてなくて…」

「いえいえ、そんなお気遣いなさらず！」

ヘコヘコと頭を下げる小夜子に、雪は戸惑いの表情を浮かべる。

この流れは会話に困るパターンだ、と長年の人見知り経験から察した小夜子は、すかさず雪に声をかける。

「あの、柊、さん？」

「あ、柊でいいですよ。敬語も別にいいですよ」
「えっ…」

距離感の詰め方エグいなこの娘。

「じゃあ雪ちゃん…？」

「わーっ、あのサヨに名前呼ばれちゃったー！」

感情忙しないな、この娘。

陽をも超えた明るいキャラクターに少し警戒心が解けた小夜子は、躊躇いを無くして「雪ちゃん」と呼ぶ。

「ここでの黒山さんってどんな感じなのかな？」

「黒山監督、ですか？」

「あ、私にも敬語はなしでいいよ」

「いやでも、さすがに…」

「雪ちゃんだけ私に敬語なのも何だかよそよそしいでしょ？それに私は、雪ちゃんが思ってるよりも優しい人じゃないから…」

彼女の視線は小夜子に向いていない。フィズのサヨに向いている。そう見られているのは嬉しいことだ。忘れられていないんだな、と実感できる。しかし、フィズはもう活動を停止している。小夜子自身も、芸名は慣れ親しんだ略称のサヨではなく、本名の真白小夜子と名乗るようになっている。

私を見ているようでいて、私を見ていない。その事実から逃げるよ

うに、雪にそう告げる。

「……うん、サヨ」

「それでいいよ」

「なんだか照れ臭いし違和感あるけど……。まあ、墨字さんのことで」

「はい」

「墨字さん、ね〜…」

先ほどとは違い彼のファーストネームを言うが、口にした主観に苦虫を噛んだような顔をして、捻り出すような声を上げる。

「質問に質問で返しちゃうけど…サヨから見た墨字さんってどんな感じ？」

「えっ」

雪からの質問返しに考え込む。

普段の黒山さん？不潔、悪人面、口悪い、変なところでストイック、変なところで真面目、笑顔が凶器的に似合わない、たぶんだけどヒモ。

「……無理な人」

「まさにその通り。ここでもそんな感じ。特に目的も教えないで、勝手に仕事断ったりして私たちを振り回してばかり…」

「し、心中お察しします…」

目当ての人間にとんでもないこと言ってる。バチ当たらなければいいけど。

「でも、何かを撮ることに関しては、やっぱり凄いや、あの人」

声は少し呆れが混じっていたが、顔は何かを自慢する少女のようだった。自分のことでもないのに、自分のことのように友達に父親の自慢話をする娘。この世界で最もピュアで可愛い、でも百パーセント事実な姿。

ああ、黒山さん、なんだかんだで愛されてるじゃん。

放っておけば身を滅ぼしてしまいそうな普段の彼の立ち振る舞いから、少し安堵すると同時に羨ましくも感じた。

「でも仕事勝手に断るのはやめてほしいよ。収入源潰す気なのかなあの人…」

「まあ昔から妥協を許さない人だから」

「部下を抱えてる自覚を持ってほしいわあのヒゲ…」

「なーに他人の悪口言い合ってたよ小娘共」

と、二人の会話の間に入る男の声。噂の矛先、黒山墨字だ。A4サイズの茶封筒を小脇に、感心したような目で小夜子を見る。

「よお真白。意外と早く連絡寄越したな」

接待室に入るや否やコーヒーメーカーでカップにコーヒーを注ぐ。睨りながら、事務席の椅子に腰掛ける。

「おまえのことだから半年は寄越さないと踏んでいたけどな」

「む。舐めてもらっては困りますよ黒山さん。社会人として当たり前
の行動を取ったままでです私は」

「なら土産は？」

「社会人としての自覚が足らず大変申し訳ありません」

「よし、それでこそ真白小夜子」

「来て早々に客を弄ぶな」

そうツツコミを入れつつも、雪はクリアファイルに纏めた書類を黒山に差し出す。「次のクライアントから出された企画書です。絶対に目を通してくださいね」と、力強く念を押す。気怠そうに書類を受け取りつつ、黒山は持っていた茶封筒からまた別の書類を取り出してそれを読み始める。

「このっ…」

「ああ安心しろ。これは断んねえから」

「それが普通なんですよ！……でもこれはってどういうことですか？」

その書類に目を通す黒山の目は、いつもの世の中を奪還しきつたような眼差しではなかった。食い入るように、撮影した映像を確認するかのような目だ。

雪はまだしも、小夜子はカメラ以外を前にしてこんな目をする黒山を見るのは初めてだった。

「そのCMを撮影するのに良さげなやつが見つかりそうなんだ」

「それって……もしかしてサヨのことですか？」

え？

驚いた。しかし確かにそれなら黒山が小夜子に連絡先を渡したのも合点がつく。自分の仕事として利用する。そういうことか？

「黒山さん、またあなたに撮ってもらえるなんて私…」

「いや違うよ？おまえじゃないよ？」

——え？

驚いた。この男、ケロリと吐き出した。何言ってるのコイツ、恥ずかしつ。そんな表情だ。

「クライアントの条件とも合っていないし。見てみるこれ、十代後半から二十代前半が好ましいってあるじゃん」

提示された書類には、確かにそう書かれていた。年齢は十代後半から二十代前半、芸能活動の有無は特に問わない、と。

——確かに、私対象外だわ。

「おまえ確か二十六じゃん。無理じゃん。テーマに添えないじゃん！」

「このヒゲがあつ！女性に年齢のこと言うなボケコラアツ！」

覆しようなない事実と、もう二十六になってしまったという二つの悲しみが小夜子を静かに泣かせた。

私、もしかして婚期遅れまくってんじゃない？

その問いに返ってくるのは男の笑い声と女性の怒鳴り声だけだった。

「——で、巖のジジイのところはどうなんだ？」

出前のラーメンで食卓を囲む三人。味噌ラーメンを頬張る小夜子に、麺をほぐしながら黒山は尋ねる。

「まあ、今のところは順調、なのかな」

「へー。羨は？」

「やめてくださいそれ、割と気にしてるんです」

「調教に比べたらマシだろ？」

「調教も味わったことないですから！」

食事時に話すことじゃないよね、これ。

「……でも、わからないこともまだまだあります」

「わからないこと？」

雪が鸚鵡返しで聞く。メンマを口に入れて、噛み切って飲み込んだところで続ける。

「うん、阿良也く……共演する子に言われたんです。役者とは何かって」

「役者とは何か」

チャーシューを噛みながら雪は考える。黒山は面白そうに笑みを浮かべる。

「それがまだわかんないって？」

「はい。正直」

「役者とは……演じること？誰かになりきること？」

「私もそう言ったの。そしたら、興味無くしたみたいにその子はどっか行っちゃって」

今ならわかる。少なくとも、あるとき小夜子が出した答えは正解ではないということが。

人はなぜ生きているのか。なぜ心臓は動き続けるのか。それに似た哲学ともいえるクエスチョン。単純なようでいて、考えれば考えるほど複雑に絡み合う問いかけだ。

「無事に役を演じきることができても、この答えがわからなきや意味がないと思うんです」

役の表面だけを受け取り、潜ることなく演じて、それでは自分がここにいて意味がない。

役者とは何か。

この答えを出すことこそが、小夜子にとっての目下の目標だ。

「黒山さん、私どうしたらいいのかな……」

「さあ？知らん」

深刻な声の小夜子を、黒山は手短に切り捨てる。麺を啜りきり、レンジでスープを混ぜながら小夜子に言う。

「俺は役者じゃねえからな。出せるアドバイスなんて殆どねえよ」

スープを口にし、「いつもより薄いなこれ」とこぼしつつ胡椒を振りかける。

「ただ、その答えは、おまえが思ってるよりも単純だと思うぞ」
「単純…？」

小首を傾げる小夜子に「ああ」と黒山は頷く。

「役者つっ—のは誰でもなれる職業だ。体動かして声張って台詞読みあげるだけだからな」

極端な意見ではあるが、黒山の言うことに間違いはない。

売れることができる、役者の仕事だけで生きていけるのはほんの一握りではあるが、名乗ることは誰にでもできるし、求められるスキルも伸ばそうと思えば誰でも伸ばせる。

動き、声、容姿。そのどれもが、本人が変えようと思えばいくらでも変えられるし、適材適所としてそれぞれ相応しい場面で活かすこともできる。

「免許が無えんだよ、役者っていうのにはな。車の免許も取れない歳のガキでも、役者を名乗ることはできる」

スープを飲み干した黒山は、グラスに注がれた水を飲み、「それに」と付け足す。

「おまえは二十後半に入ってこの世界に挑んでるんだ。なんとなくわかってるんだろ」

黒山のその言葉を触媒に思い出す。

そうだ、私がこの世界に入って、天球のみんなと一緒に歩き始めて一ヶ月が経つじゃないか。

スタートラインはマイナスからなのに、みんなは私を除け者にしない。それどころか、みんな私に期待を寄せている。

それなのに、私はまだ期待を結果で返せそうにない。まだ何か足りない。

私に今必要なものって、なんだ。

演技力は良くなっているのに、巖さんはいまだに褒めてくれないし認めてもくれない。自分でも自覚できてしまうぐらいに芝居が上手くなっているのに、潤わない私の渴望。

この渴きを潤すのに必要なものって、一体——。

相変わらず厳しい巖さん。

何言ってるかわからない阿良也くん。

いつも気にかけてくれる七生ちゃんと亀くん。

何かあるたびにアドバイスをくれるみんな。

その人たちの助けと期待と情を返すために、私に足りないもの。それは私の渴望の潤いと同じ答えになるはず。

誰でもなれる職業に、私が手を伸ばした理由。そしてそれを掴んで、ずっと離さないために必要なもの。

ああ、そうか。

「私、覚悟が足りてなかったんだ」

水面から顔を出した気分だ。

ジリジリ肌を焼く太陽に身を晒して、ベタベタな髪をかきあげる。

見上げる太陽はどこから見上げても変わらないはずなのに、より一層眩しくて熱く見える。

「やっと、理解^{わか}った」

思い立った小夜子はすかさず立ち上がり、財布から千円札を取り出してテーブルに置く。鞆とカーデイガンを抱え込む。

「ありがとう黒山さん、雪ちゃん！私行ってくる！」

「あ、その爪楊枝取って真白」

「空気読んでよ！」

と返しつつも爪楊枝の入ったケースを黒山に手渡す。

「行ってこい。あのジジイから教わるものは全部財産になる」

「あんまり無理しないでね」

「うん、二人ともまたね！」

ドタバタと騒々しくスタジオ大黒天を後にする。走って走って、バスの停留所も、駅のタクシー乗り場にも目をやらずに走る。

ただ今は走りたかった。それが今までの自分への罰だ。どんだけ鈍感なんだよ私。こんな単純な答えに一ヶ月も使うなんて、バカにも程がある！

汗がスキニーパンツに染み付いても、丁寧にセットされた髪が崩れても、何も気にしなかった。

だって、今がこんなにも楽しいんだから。

稽古場に着いた小夜子は、先に稽古を開始していた天球の面々から心配されていた。

「え、なに、事件か何か？」

「アホ亀。ただの鬼ごっこでしょ、サヨのことだし」

私、普段みんなからどんな目で見られてるんだろう、と気にしつつも、目で阿良也を探す。皆が集まる中で一人、タオルを枕代わりに横になって寝ている阿良也を見つけた。

「阿良也くん！」

久しぶりの全力な走りに疎む両足。バランスを崩して阿良也の目の前で無様に頭から倒れこむ。

「……えーっと、大丈夫？真白サン」

「平気！それよりわかつたの！」

身体中が痛む。それでも、口を開く。言葉を止めない。

この答え合わせこそが、小夜子にとっての人生の岐路になると小夜子自身が直感したから。

「私、覚悟持てたよ！役者を名乗る覚悟！」

「へえ」

阿良也の表情が変わった。

それまで当たり障りのない景色を見るような目が、太陽に照らされた宝石のように輝いた。

「そうか」

そこに杖で床をつき、間に巖が入る。

彼の顔は、小夜子の目には少し満足げに見えた。

「正解だ真白。よく辿り着いた」

あ、やっど、本心で褒めてくれたこの人。

やっど、スタートラインに立てた。一ヶ月かかって、だいぶ遅れて、でも確かに立てた。

「はいっ！」

小夜子の目から涙がこぼれ落ちた。その涙は雨のように止まることなく、小夜子のシャツと床を濡らし続けた。

「あれ、なんで、泣いてるんだろ……」

「あーもう、本当に感情が忙しいなサヨは」

七生がタオルを小夜子の顔に押し当て、背中を優しく摩る。その優しさすら、いまの小夜子にとって涙腺を壊すのに充分だった。

「ありがとう〜！七生ちゃん〜！」

「私に涙かけないで！」

涙で顔がぐちゃぐちゃになってしまっている小夜子の肩を阿良也が叩く。

「真白さん」

「へあ…？」

初めて阿良也くんから声を掛けられた。

その何気ない事実にも、少し驚く。

「今までの非礼を詫びるよ。今のあんたはよく匂う。改めて、これからよろしく」

差し出された手を、小夜子は迷うことなく握り返した。

「こちらこそ、改めてよろしく〜！」

本当の意味で、阿良也と仲間になれた気がした。同じ舞台を作り、盛り上げていく仲間になれた気がしたし、認めれもらえた気がした。

笑顔と涙が入り混じったカオスな顔を振りまく。事務所NGな顔だけど、みんな笑ってくれてるし、こういう時ぐらいいいよね。

「……で、早速なんだけどき」

「うん、何かな？」

阿良也からの問いに、小夜子は頷く。なんだろう、連絡先の交換とか？

「真白さんの家行つていい？」

涙が一瞬で止まった。